



東北ヘルプ ミニ・ニュースレター

2018年夏号 「復旧を超えて」

目次

- 巻頭言 「復旧」を超えて 1～2頁
- 障がいと町興しを。石巻地域の水産加工物を全国の皆様に
(シャロームいしのまき「べてるの風」インタビュー) 3～4頁
- 応援の文化を根付かせたい・ばっばコーポレーションのご紹介
(特定非営利活動法人「応援のしっぽ」代表 広部知森) 5～6頁
- 被災後の日常と子どもたち1 仮設住宅集会場から見えるもの
(インタビュー 「出前寺子屋」 谷村和枝さん) 8頁
- 被災後の日常と子どもたち2 「どうせ」と言わずに夢をもって
(インタビュー こどもの夢ネットワーク代表 ト藏康行さん) 9～10頁
- 被災地に新しい仕事を興す1 自由な「仕事」を、力を合わせて
(インタビュー 恵プロジェクトのみなさま) 12頁
- 被災地に新しい仕事を興す2 「ボランティア」が終わり「仕事」が始まる
(インタビュー ハートニットプロジェクト 松ノ木和子さん) 13～14頁
- ハンドクラフトで、新しい街興しを
(インタビュー ライフワークサポート響 阿部泰幸さん) 15～16頁
- 献金感謝 ・ 編集後記 ・ 会計報告 17～18頁

巻頭言 「復旧」を超えて

1.

2011年3月18日、仙台市内にある日本基督教団東北教区センターで誕生した私たち「東北ヘルプ」は、全国・全世界のみなさまに支えられ、7年の年月を通して「支援者を支援する」働きに従事して参りました。

今、8年目の被災地に立って、私たちはその先を見据えてみたいと思いました。すると、「復旧」と「復興」という二つの言葉に、気づけなかった色取りの違いが見えてきました。

貴い支援と国税の投入によって、被災地の「復旧」は進んでいます。でも「旧に復する」ことは「もともとあった問題」に改めて向き合うことを意味します。その問題とは、例えば高齢化・過疎化・少子化です。そうした問題に対する新しい取り組みが、復旧後の被災地に興るのかどうか。それが「復旧」を超えて目指される「復興」なのだと思います。

今回、ニュースレターのテーマを「復旧を超えて」といたしました。そして現場で今も苦闘されている支援者を訪ね、このテーマをもって対話を続けてまいりました。その成果が、以下にご覧いただけたと思います。

今回、私たちは「フクシマ（広域に広がる福島第一原発の爆発事故の被災地）」を取り上げることができませんでした。それはつまり、原発事故の被災地は、いまだ「復旧」へ向かう遙かな道のりの途上にある、ということなのだと思います。今回のニュースレターの作成作業には、痛みが残されました。

2.

2018年度が始まりました。ここで皆様

ヘルプは2017年度を1200万円の予算を立てて進んでまいりました。2018年3月末の時点で、一年間の募金は12,044,265円となりました。ちょうど、予算通りの収入を得て、予算通りの支援活動ができましたことを、深い感謝と共に報告いたします（巻末の会計報告をご覧ください）。

2018年度は、もう一段の経費削減を行い、年額1000万円の予算で活動を進めたいと思っております。心強いことに、2017年度の献金件数は、過去最高の751件でした。2015年以来、献金件数は一貫して増加しております。そのほとんど全ては、国内の個人や教会・施設や学校です。皆様の大きなお支えを、本当に心強く感じております。

3.

残念な報告もしなければなりません。多くの方々からご協力をいただいて開始しました「扶助基金」についてです。

基金を用いて生活困窮者を地域の世話人が支援し、そしてそれがその地域の相互扶助を生み出すきっかけになる——そんな目標を示し、具体的に試行錯誤を続けてくださった方がおられました。佐藤由和さんとおっしゃる、南三陸町戸倉で被災者された当事者でした。被災直後から地域の方々のために粉骨砕身の活動を続けられた影響でしょうか。昨年体調を崩されていましたが回復され、ほっとしていたところ、今年3月に自宅で倒れられ、そのまま4月に逝去されました。

佐藤由和さんが、扶助基金の発案者であり推進者でした。彼の実践を見ながら、他の地域での基金の運営も少しずつ開始されたとい

ろでした。佐藤さんの逝去によって、私たちは基金のこれからを考え直さなければならぬこととなりました。2か月ほど、私たちは喪に服してご遺族と悲しみを共にしました。そして今、新しい「扶助基金」の在り方を考え始めています。

佐藤由和さんの逝去は、震災から7年を過ぎた、ということの、その具体的な意味を、実感をもって感じさせる出来事となりました。被災した他の地域・分野でも、第一線で活動してきた方々が皆、等しく7年分の歳をお取りになった。その影響は、これからいよいよ具体的に見えてくるのだろうと思います。

4.

喜ばしい報告を最後にいたします。「キリシタンツアー」の進捗です。

被災地は大きな痛みを覚えながら、しかし、国内外から訪れる多くの方々との出会いの中で復旧してきました。しかし、その交流人口も、2015年ころには減少傾向が顕著となっていました。そのころ「国内外から被災地を訪れる方の中に、旧仙台領のキリシタン史跡を訪ねたいとおっしゃる方が多くおられる」ということに気づき、交流人口の維持増加へとつながられないかという声が、複数、東北ヘルプ事務局に寄せられました。

そこで事務局としては、①仙台白百合女子大学カトリック研究所のお力をお借りして「東北キリシタン研究会」を立ち上げ、②長崎・五島列島の状況を学び、そして③各殉教地の自治会・市役所・観光協会の皆様と協力関係を築く努力を続けました。そしてそれと並行して、全国の諸教会の研修旅行等に「東北キリシタンツアー」をご活用いただけるよう呼びかけ、各殉教地をご案内しつつ、被災

地現地で活動する支援者との出会いの場を設けてまいりました。

そしてこの2018年度から、韓国の旅行社によるインバウンド誘致を具体的に検討し、また、地域の自治会の皆様と一緒に「ボランティアガイド講習会」を行うこととなりました（下に、その案内をご紹介します）。

まだ緒に就いたばかりの活動ですが、3年の積み重ねは確かに実りをもたらしつつあります。継続の力を感じます。継続してお支えくださった皆様のお力を感じています。

以上、事務局の報告をもって巻頭言いたしました。以下、「復旧を超えて」というテーマで致しましたインタビューをご高覧ください。ここにはまだ掲載できませんでしたが、宮城県でも、原子力災害から子どもを守ろうとする活動が、新しく始まりつつあります。次回には、そのご報告もできるかと思えます。引き続きのご支援を、どうぞよろしく願いいたします。

(2018年6月7日 事務局長 川上直哉 記)



平成30年度一関市地域おこし事業

事業趣旨
大籠・猿河原(米川)・馬籠地区は、伊達藩時代本吉郡といわれ、製鉄に従事したキリシタン信徒等、多い時には2〜3万人が住んでいたといわれる。今も多くの史跡が点在しているが、史跡等の案内(ガイド)を担う人材の高齢化など、充分な対応が難しい状況にある。今回、3地域が一体となり、共通のガイド養成、史跡の保存・伝承・普及の充実を図り、地域の振興発展に寄与することを目的とします。

養成事業プログラム

| | | |
|--------|-----------------|---|
| Part.1 | 5月26日(土) 10:00〜 | 史跡巡り |
| Part.2 | 6月16日(土) 10:00〜 | 講話「仙台藩本吉郡のキリシタンについて」 講師:東和町郷土史研究会 顧問 佐藤直喜氏 |
| Part.3 | 7月28日(土) 13:00〜 | 講話「仙台藩における3地域の役割」 講師:仙台白百合女子大学 研究員 川上直哉氏 |
| Part.4 | 8月25日(土) 10:00〜 | 講話「大籠キリシタンと製鉄産業について」 講師:水沢教会 神父 高橋昌氏 |
| Part.5 | 10月上旬 | 講話「本吉郡の製鉄等の産業について」 講師:馬籠風土研究会 歴史部会長 佐藤一郎氏 |

事例発表、終了式

Part.1 史跡巡り
2018 5月26日(土)

◇時間 10:00〜15:00
◇集合場所 大籠キリシタン資料館
◇会費 一人1,000円(昼食代含む)
◇交通手段 レンタバス
◇内容 各地区の史跡見学

申込先 下記の地区担当まで電話でお申込みください。
申込締切 2018年5月22日(火)

■参加申込み先 (大籠地区) 大籠キリシタン資料館 沼倉 ☎0191-62-2255
(米川地区) 米川公民館 鈴木 ☎0220-53-4155
(馬籠地区) 佐藤 ☎0226-43-2424
■主催/大籠キリシタン史跡保存会 ■協賛/大籠地区自治協議会

今回のニュースレターは、テーマを「復旧を超えて」としました。新しい「仕事」や「生き方」が興ってこなければ「復興」という言葉にふさわしい現実は生まれません。そう思っています。そうした思いを込めて、今回、商品カタログを同送いたしました。その作成は、「一般社団法人 シャロームいしのまき」（理事長 大林健太郎）様によるものです。この春、社団法人の事業として、就労継続支援B型事業所「べてるの風」を始めたばかりの大林さんに、「復旧を超えて」というテーマで、語っていただきました。（聞き手：川上直哉）

障がいでも興しを。石巻地域の水産加工品を全国の皆様に。

（シャロームいしのまき「べてるの風」インタビュー）



ここ石巻地域は、津波による壊滅的な被災が復旧しつつあります。泥まみれの缶詰が「希望の缶詰」と全国の皆さんに呼ばれるようになり、全壊した水産加工場は再建され、皆さんの励ましの中、水産加工食品が製造されるようになりました。水産加工業を中核とする石巻の復旧は、確かに進みつつあります。

しかし被災前と比べた水産加工業の回復率は、石巻市役所によると、「数量で50%、金額で70%」となっています。数量と金額の間にある開きが、深刻な現実を映しています。被災工場を再築する間に、取引先（スーパーなど）が被災地域以外の地方の方々と取引を開始した結果、販路が細り、寡占化が進み、地場の企業が苦しむ形で「復旧」が進んでいる。それが、この「20%の開き」に現れているのです。

石巻の可能性

そうした中で震災前の業績を超えた地元企業があります。「木の屋石巻水産」さんです。「木の屋」さんには、復興へと進む物語があったことが、その違いを生んでいます（ぜひ、インターネットで「希望の缶詰」と検索してみてください）。

石巻には、可能性があると思うのです。そもそも、熟練した水産加工職人の宝庫です。たとえば、「小女子（こうなご）」という魚は、窯炊きが一般的な食べ方でした。それを缶詰にしてみよう、という意見が、若い人のなか

から出てきました。そして「柔らか小女子」という商品が生まれ好評をいただいています。これは震災後の工夫でした。こうした可能性を、震災後の新しい「町興し」として生み出すことが、石巻の可能性なのだと思います。

新しい「町興し」

石巻で障がいと共に生きる方々は、震災当時集う場所すら確保できずにいました。しかし震災を契機に、教会などの心ある人々と出会うことができました。そして「もう、ひとりぼっちにさせない」と語り合い、この被災地で生活を続けてきました。そこに、新しい「町興し」の物語の可能性が、もうひとつ、あると思います。

北海道・浦河町の高齢過疎のただなかで「弱さを絆に」を合言葉に、事業を起こし、町を活性化させている団体がありました。「べてるの家」といいました。その「べてる」の皆さんが、震災後、私たちをつなぎ、励まし、前へと押し出してくださいました。

被災の日常を生きる企業の皆様と力を合わせ、私たちは「べてるの風」を立ち上げました。水産加工の仕事を引き受けつつ、被災を契機得た出会いを辿って販路を開拓させていただく。そうして「地域と障がい者が共に生きる町」が、被災した石巻に興ってくる。

一番小さく、弱くされたところに新しい力を見つけながら「障がい町興し」を。水産加工食品を通して、全国の皆さんとつながり、新しい石巻をつくりたい。そう願って昨年に続き、今年もカタログを作らせて頂きました。

支援を超えて

昨年から活動を始めた「べてるの風」は、今年度から宮城県の認可事業となりました。

この働きによって、地域に生きる障がい当事者に仕事が生まれます。今は「時給 160 円」の仕事ですが、これを 5 年以内に「300 円」へ引き上げたいと思っています。そうなれば月額 7 万円くらいの給与を得る計算になります。通常、障がい者の皆さんは一人当たり月額 7 万円くらいの年金を得て暮らしていますから、生活には潤いが生まれます。そのために、売り上げを今の倍にしたいと思うのです。そうしますと、計算上ですが、地域には 2 千万円以上分の「経済効果」が生まれるそうです。昨年、その最初の一步において、私たちは確かな手ごたえを得ました。それは、「支援」の枠組みを超えて、被災地とつながってくださった皆様に石巻の水産加工商品が喜んでいただけた結果だと思います。

一般に売り上げを高く維持するためには、商品に「物語」が必要だ、といいます。私たちは、被災地の復興の物語を担っています。その物語をもって、地域と共に進みたいと思うのです。それが石巻発の「モデル」となり、全国に広げられればと夢見ているのです。商品売り出し、それを購入いただくことで、被災地の復興が進む。復興が進むことで、地域と共に生きる被災者・災害弱者が更に支えられる。そういう循環が、石巻で生まれつつあります。これを本格軌道に乗せたい。

課題は「べてるの風」の利用者さんを増やすことにあります。そのために、ボランティアのお力をお借りできれば本当に助かります。「べてるの風」は、最寄り駅（JR 万石浦駅）から徒歩で 5 分足らずの場所にあります。発送手続き、在庫調べ、海産物選別（一次加工）など、お手伝いいただければ幸いです。なにより、その作業は楽しいですよ！

（了）

応援の文化を根付かせたい

特定非営利活動法人「応援のしっぽ」

代表 広部知森

はじめまして。私は、東日本大震災を受けて支援活動を始め、そのまま石巻に移住して今日に至っています。寄附文化が育っていない日本の状況を振り返り、少しずつでも、寄附文化を育てたい、と考えて、2011年10月に「応援のしっぽ」という団体を立ち上げました。「相互扶助」あるいは「助け合い」といわれるものを、仕組みとして作りたいと願っています。

今は、コミュニティを重視して活動しています。一つは、支援から生まれた手仕事の製品を商品として販売しています。もう一つは、孤独死を防止するために、ワークショップで手作りの作業をみんなでするお手伝いをしています。七か所の集会場などをお借りして、月一回、催事を開催しています。そして、この活動のために、情報を発信し、販売支援（販路開拓）をしています。

「支援」は、どうしても、精神的な上下関係を生みがちだと感じています。それで、私たちは、ちょうど「組合の窓口」のように自分たちを位置づけて活動しています。具体的には、仮設住宅や復興公営住宅で動いている手仕事製品の注文窓口と受注発送センターの役割を担っています。

今回、機会をいただき、「シャロームいしのまき」等のみなさまの商品と一緒に、別冊パンフレットにて、私たちがお手伝いしているグループの手仕事製品をご紹介させていただけますことを、感謝しています。今回ご紹介するのは「ぱっぱコーポレーション」です。以下はその紹介文です。ご一読いただき、カタログに掲載いたしました商品もご高覧いただければ幸いです。



ぱっぱコーポレーションさんを始め7団体との交流会。一番奥が広部さん。

ばっばコーポレーションのご紹介

ばっばコーポレーションは、宮城県石巻市鹿妻で活動を行っています。ばっばとは「おばあさん」という方言です。

震災が起こったばかりの頃、作り手さんたちはお茶っこするために集まっていたのですが、支援で集まった布を使って何か作ってみようと思いました。当時新潟県の商工会の会長を勤めていた方がお茶っこしながら手作りしていた“ばっば”たちに「どうせ作ったのなら売らないか」と誘いをかけ、新潟の【カナル彩】というイベントへ出店することが決まりました。そこで自分たちの商品は売れるんだという自信を得て、団体として活動が始まりました。

活動を始めてから、新潟県の商工会を始め、多くの方に助けられました。一番身近な支援者は作り手さんの家族でした。作り手さんはお年寄りの集まりなので、パンフレットの印刷など機械に関することでは、特に助けてもらいました。今、活動を続けていられるのはここまで色んな人たちが支えてくれたおかげです。

活動のことを話しているときに、「皆でお茶飲みすることが楽しいんですね」と聞くと、「それもあるけれど」と外に出たいこと、1人きりはさみしいので誰かに会いたいこと、おしゃべりをしたいことなどから集まっていることを話してくれました。震災が起こってから、近所の人々の顔を意外と知らなかったと実感したそうです。



作り手さんの悩みはもっと商品が売れてほしく「寝ないで作っても構わないからもっと仕事があれば」と意気込みを話していました。団体では、活動で得た資金をもとに鹿妻に住んでいるおばあさんたちとカラオケやお茶っこを行っています。商品が売れてほしい理由の背景には、その活動を続けていきたいという思いがありました。90歳を超えた足腰の悪いおばあさんがお子さんたちに送られてカラオケで必ず曲を歌っていくそうです。その姿を見ていると、続けていかなければいけないという気持ちになるそうです。今度は自分たちが町にお返しをする番だとお年寄りの皆さんを支えています。「自分たちももうおばあさんなのにね」と笑って話していました。(了)



被災後の日常を生きる子どもたちの様子は、どうなっているのでしょうか。

2013年7月28日の毎日新聞に「東日本大震災被災地での児童虐待 増加率高く 福島沿岸部は過去最多に」という記事が掲載されました。このころ、被災地のあちこちで同様の議論がなされていたことを思い出します。その結果、なのでしょうか。直近の厚生労働省の発表する統計データ（「児童相談所における児童虐待相談対応件数速報値」）を見てみますと、2010年と2017年の間に、宮城・岩手・福島の所謂「被災三県」で、虐待相談件数は188%の増加となっていますが、全国の件数は234%の増加となっていました。被災地の子どもを巡る環境は、一時期よりも改善されたのかもしれませんが（あるいは、全国の状況が被災地を追い抜いて悪化しているのかもしれませんが）。

確かに、被災地には多くの「子ども支援」の活動が展開しました。その働きの成果が、数字に表れているのだとすれば、本当に幸いなことだと思います。そして、その働きの現場で見えている事柄は、被災地の「復旧」を超えて、子どもの養育を巡る新しい環境を生み出していくモデルとなるのかもしれませんが。

今回、被災地の子ども支援を展開する二つの団体の責任者に、インタビューをすることができました。一つは「出前寺子屋」の谷村和枝さんのインタビュー、もう一つは「こどもの夢ネットワーク」のト藏康行さんのインタビューです。

「出前寺子屋」は、定期的に宮城県石巻市で学習支援を継続しておられる活動です。参加は被災地に住むすべての人に開かれており、参加費は無料です。谷村さんはプロの塾講師としての技術とネットワークを駆使し、大学生やネイティブスピーカーと一緒に仮設住宅団地の集会室で活動を続けておられました。その活動の特徴は、「学ぶ喜び」を分かち合うところにあります。もちろん学習支援ですから、児童生徒が集まり、受験対策も行われます。しかし同時に、大人の方々も集まり、語学などのレッスンも行われるのです。今回は特に、児童・生徒たちとの出会いの中で最近気づいておられることをお話し頂きました。

「こどもの夢ネットワーク」は、様々な理由で苦勞と向き合う子どもたちを支援する取り組みです。代表のト藏さんとは、震災後、支援仲間となった曹洞宗のご僧侶から「被災児童のために具体的に取り組みを始めたい」と相談をいただき、相談にお伺いして以来、様々にご指導を頂いて参りました。なお、幸いなことに、その曹洞宗のご僧侶は無事に「ファミリーホーム」という枠組みで子ども施設を開始し、その活動は軌道に乗っています。

それでは、以下、谷村さんとト藏さんのインタビューをご覧くださいませ。

(2018年6月6日 川上直哉 記)

仮設住宅集会場から見えるもの

インタビュー 「出前寺子屋」 谷村和枝さん

——石巻市でも、仮設住宅の統廃合が計画されているそうですね。

はい。30年度中は今のまま、これまで通り、仮設住宅は維持されます。もうずいぶんたくさんの人が仮設住宅を退去しました。そして今年度を以て、ほとんどの仮設住宅は終了し、一部の仮設住宅団地に統廃合をしていく、というのが石巻市の方針とされています。——そうした中で、今でも学習支援を続けておられますね。

はい、現在、22人の方が受講されています。その5人は小学生で、その全員が、仮設住宅を出ましたが、継続して通ってきています。大人の受講生の中には、隣の東松島市からも通って来られる方がおられます。会場となっている仮設住宅団地の集会室が今年度いっぱい使用できなくなりますから、今、その先のことを考えなければなりません。

——最近印象に残った出来事は何でしょう。

参加者の中に、四人の高校三年生がいます。その三人のこの春の出来事を思い出します。

一人の高3生は、「国立大学は学力的に無理だから、大学進学をやめる」「それは自分の意思だ」と言って、石巻市内に就職しました。震災前に住んでいた家が津波で流出し、再建したのですが、その際のローンを親子で組んだとのこと。それで、親御さんが「私立大学は無理だ、本人に断念してもらいました」と私に語りました。家庭の経済的現実を高3生の彼は何も語りませんでした。

2人目の高3生は、津波が家に押し寄せ、膝まで水が来たけれど、“その程度”で済んだ、

ということで、その体験を誰にも語るができないで過ごしていました。「もっとひどい人がたくさんいるから、自分は被災者とは言えない」と、言っていました。それでも、彼女の生活は一変したのです。彼女は私立大学受検は「経済的に無理」と言って、難関の国立大学を第一希望に、地方の公立大学を第二希望にして、受検に取り組みました。第一希望合格通知までの3ヶ月間、とてつもない不安に苦しんだと語りました。

また別の高3生は、家が津波で流出しました。三人姉妹の末っ子でした。仮設暮らしの中で、お金はかけられない、という事情を察し、学力ランクを下げた安全に受かる公立大学に進学しました。これもつらい現実でした。

経済的な現実を前に、夢をあきらめる人と、諦めない人が出てきています。社会はそのように、人を線引きしなければならないのでしょう、もし、今のままの世の中であるなら……。そうした現実と向かいながら、被災地の子どもたちは大人になって行きます。

(了)



出前寺子屋の記事が掲載されている地元紙を読む、谷村さんと英語担当のケンドールさん

「どうせ」と言わずに夢を持って

インタビュー こどもの夢ネットワーク代表 ト藏康行さん

——ト藏さんが代表を務めている「こどもの夢ネットワーク」について、その概要を教えてください。

「こどもの夢ネットワーク」を始めて、今年で10年目になります。虐待や死別などによって困難に直面する子どもとその家族をみんなで支えることを「社会的養護」といいます。その目標を共有しているのが、たとえば「児童養護施設」と「里親」です。この二つの働きの間をつなぐのを豊かなものとしよう、と、私たちは活動を続けてきました。その最初は仙台キリスト教育院との協力関係の中で、まさに「手弁当」だったのですが、ゆっくり時間をかけて、行政も巻き込みながら、今日に至りました。おかげさまで活動は広がりを見せ、3年目には大学の研究者や宮城・山形・福島の各県の児童養護施設と共に、成人となった後の子どもたちのアンケート調査を行うことができました。まさにその時に震災となったのでした。

調査の結果、「施設を退所した後の相談場所が欲しい」「社会に出てみたが、仕事が続かない」という課題に、成人となった後の課題が見えてきました。そこで、私たちの活動の柱を「自立支援」にしていった、のでした。

——震災後の支援の目標も「自立」に置かれています。つながるところが多いように思われます。

はい、そうだと思います。私たちは調査を

もとに「夢っぼ」という施設を開所して、退所者の住居支援を始めました。

震災によって県内でも130人を超える孤児が生まれました。その受け皿をどうするかが大問題となったことを覚えています。そして結局、「震災孤児」のほとんど全てが「親族里親」に引き取られて行きました。これは予想外のことでした。でもそのおかげで、影響は最小限に抑えられたと思います。私たちはその里親さんたちを支援するべく、震災の後、県の委託事業として、「サロン」を毎年10回程度開き、相談に応じてきました。

——今感じる課題は何でしょうか。

親御さんを亡くされた被災児童への支援を見て、支援の「手厚さ」を感じています。いまだに物資の支援もあるのです。そしてその結果、必ずしも「いい影響」が出ていない、という話も聞こえてきます。

そうしたことを見て、今、全体的に考え直さないといけないような気がしています。

たとえば、仙台や石巻などの都市部では、もともと「ひとり親」の家庭が多いのです。そこに被災した、という現実がのしかかっている。でも、そういう所には、支援の手が届きにくい。他方で、いったん「親を亡くした」となると、過剰なまでに手厚くなる。同じ被災地を生きる子どもたちへの、このギャップは、いったい何なんだろう、と思うのです。「社会的養護」という考え方は、

まだ、その程度の底の浅さなのか、と、課題を感じているところです。

——今年で活動が10年となる、ということですが、被災経験も含めて、今後への展望をお話しくださいますでしょうか。

この10年の私たちの活動の成果として、確かに養護施設と里親の関係は変わったと思います。両者の距離は近づきました。共通する課題を一緒に考えられるようになりました。そしてはつきりしてきたことがあります。それは、「児童養護施設」には、「里親」に対して支援を行う可能性が豊かにある、ということです。ですから、両者が結びつきを強めれば、里親がエンパワーされる。そうしたら、児童相談所の負担も軽くなるでしょう。その先には、被災後の日常の中で苦勞している被災地の子どもたち・親たちの環境に改善が見込まれると思うのです。

震災の中で、「被災児童への思い」が、社会・世間一般に、熱く燃え上がりました。一方で、児童虐待通告件数は、この間、ずっと、すごい勢いで増えています。その困難な現実に、震災の時に現れ出た「子どもたちへの思い」が繋がっていけばいいのに、と思っています。だから「震災遺児なのか、それとも、そうでないか」という厳然とした社会の線引きを、何とか乗り越えていければと願っています。

私たちは活動に「こどもの夢ネットワーク」という名を付けました。生まれや育ちを原因として、進学をあきらめる子どもさんが、まだまだ、たくさんいるのです。そこにある「どうせ」という思いを脱してほしいと強く願っています。夢を持つことを諦めないでほしい。そのために「社会的養護」が重要な役割を担っていくのだと思います。

——最後に、全国のみなさまに、アピールをお願いします。

「桑チョコ」のお話をさせてください。津波で甚大な被害を受けた仙台市若林区荒浜の農地の塩害地に「桑」を植えて復興へつなげようと、日本ハビタット協会様を中心となって「復興の桑プロジェクト」が始まりました。「新しい産業により、疲弊した農業の復興を促し地域を再生すること」を目的としたプロジェクトです。幸い、そのプロジェクトは順調に推移し、桑のパウダーが生産されるようになりました。そこで今度は、そのパウダーを使ってチョコレートなどを製造・販売し、困難な環境を生きる子どもたちを支援する取り組みが始まりました。私たち「こどもの夢ネットワーク」は、その活動の一翼を担っています。

桑パウダーを使ったチョコレートを受け取り、子どもたちと一緒に包装をしています。ひとつひとつ、手で折って包装します。その作業は、養護施設の高校生のアルバイトにもなっています。

是非、別冊のカタログからご購入いただき、被災地の子どもたちのためにお力添えくだされば幸いです。



ト藏さん(右)と、桑チョコを見ながらお話ししました。

過日、とあるキリスト教社会福祉法人の理事長をなさっている先生から、印象深い言葉を伺いました。「いまだに、教会は、奉仕と言っている」という厳しい言葉でした。私は、はっとした思いがしました。

「奉仕」と言っている限り、それは「どこか別の場所」からの支援となる。それはいつか、引き上げていく。支援には、終わりの時がある。支援される人や社会が「自立」してゆくことを目指して奉仕は進むのですから。もしそうなら、「奉仕」や「支援」の枠組みから一歩出て、地域と一緒に生きる活動へ展開してはどうだろうか——そういう問題提起を、私は聞いた気がしました。

そしてそれは、被災地支援の事柄としても、あてはまると思いました。

支援は、いつか終わります。でも、終わるとしても、何が残せるのか。まさにこの問題こそ、昨年あたりからの、私たちの議論の中心テーマになっていました。そしてその中で見えてきたことは、私たちの社会の限界を突破する可能性が、被災地支援活動の中に胎動しているのではないか、ということでした。

キーワードは「仕事」でした。私たちは、どうも、生きにくい世の中を作ってしまったようです。労働は私たちを消耗させ、あるいは追い詰めたりする。「ミスマッチ」ということが盛んに言われ、いつもどこかアンバランスで、人間が大切にされない環境が広がっている、ように感じる。そんな世の中に、一人一人を大切にしたい新しい「仕事」が生み出され、そしてそれが一人一人を大切にできる環境を作り出すことができないだろうか。

「奉仕」や「支援」や「ボランティア」の枠組みからさらに一歩進んで、生きやすい地域と一緒に作りだす。そんな可能性を感じさせる現場が二つあります。一つは「恵プロジェクト」です。そしてもう一つは「ハートニットプロジェクト」です。

「恵プロジェクト」は、アンディさんとローナさんという宣教師夫妻によって、宮城県の女川町に開始されました。お二人のインタビューはニュースレターの 2018年イースター号に掲載いたしました（東北ヘルプのホームページからご覧いただけます）。今回、プロジェクトに参加して働いているおふたりの女性にインタビューをさせていただきました。

「ハートニットプロジェクト」は、盛岡で始まった支援事業です。手編みの製品を三陸沿岸の津波被災地で作っていただき、それを販売して、被災者の現金収入の途を拓く、というものでした。今回、事務局の松ノ木和子さんに、インタビューをさせていただきました。

二つのインタビューは、被災地に新しい「仕事」が生み出されつつあることを私たちに伝えるものとなっています。そこに、きっと、「復旧」を超えて「復興」へと進む足取りを見つけることができるのではないかと思います。そんな思いを込めて、二つのインタビューをご紹介します。

(2018年6月6日 川上直哉 記)

自由な「仕事」を、力を合わせて

インタビュー 恵プロジェクトのみなさま

——改めて、恵プロジェクトについて教えてください。

今年、プロジェクトは5年目になりました。全国から和服の生地を取り寄せ、それをデザインしてアクセサリーなどを制作し、インターネットと、そして女川駅前のシーパルピアの店舗で販売をしています。



女川駅前の店舗にて、宣教師夫妻と共に

——今、どれくらいの方が、どんな感じで、このプロジェクトで働いていますか？

今は8人が働いています。全員、女川の住人です。毎日、朝の9:30から20分くらい、ミーティングの時を持ちます。火曜日・水曜日は聖書のお話を聞き、木曜日の朝は、みんなが話す時としています。

店舗は朝10時から夕方4時まで開店、毎週月曜日と第四金曜日が定休日です。

仕事場の雰囲気は、とても自由な感じです。私はもともと、物を作ることが好きでした。その好きなことを仕事にできることは、とても楽しいことだと思っています。

——プレッシャーの中で成果を求める「労働」というよりも、生きがい・やりがいを得られる「仕事」という感じになるでしょうか。

はい、私たちの仕事の大部分を占めるのは「制作」です。製作の過程にプレッシャーがかかれば、間違いが増えると思います。このビジネスには、「安心」が必要だと思うのです。

もちろん、最低ラインは提示され、チームワークが機能するように、話し合いをしています。そのために、「プロセスチーム」を作って、当事者全員で向う3ヶ月の「タスク」を決めています。その「タスク」決定のプロセスの中で、イベント、注文、在庫などが確認されるようになっていきます。

——今後の計画は？

仕事は増えつつあり、あと二人くらいは、さらに働き手が必要です。4年前にトレーラーハウスの工場が整いました。今、二台目のトレーラーハウスが稼働しようとしています。



◆◆別添のカタログにプロジェクトの製品をご紹介します。上記の工場で作られたものです。ぜひ、参照ください。◆◆

「ボランティア」が終わり「仕事」が始まる

インタビュー ハートニットプロジェクト 松ノ木和子さん

——ハートニットは、支援の「終わり方」を示しつつありますね。

私は、ハートニットを「やめる」のではなく、ハートニットが「終わる」のだと、仲間に語っています。被災者の仕事を作って、支援のプロジェクトは終わっていくものだと思うのです。そして幸いなことに、今私たちは、「仕事」へと被災者の方々をつなげて行くことができつつあります。

被災直後、心を落ち着けるためにも有効だということで、被災者のみなさまにニット作品を作成していただくことになりました。素晴らしいボランティアの講師による指導もあり、そのニット製品はどんどん品質を向上させ、いつか、教会などでのバザーでたくさん買っていただけるようになりました。

プロジェクトの事務局は、毛糸の支援を全国から頂き、それを届けつつ編み物のコーチングを行い、バザーなどに出品して皆様にお買い上げいただきてきました。そのお買い上げいただいた全額（総額で5,200万円を超えました！）は、被災者各位に、そのまま、お届けすることができました。震災直後から始めたこのプロジェクトのなかで、100名ほどの方が「アミマーさん」と呼ばれる編み手となってくださいました。その中で、元の仕事が復旧し、あるいは被災地を離れて新しい生活を始まるま

で、ずっと支えられていったのです。そして7年が経ちました。今でも40名ほどの方が、「アミマーさん」として私たちとつながり、編み続けてくださっています。本当にうれしいことに、そのほぼ全員が、一流企業の手編みの仕事を引き受けられるレベルにまで、その技術を上達なさいました。

今、私たちは一つの転機を迎えようとしています。これから、ハートニット事務局は大幅に体制を縮小し、「ボランティア」は終了して行く予定です。と言いますのは、いつまでもボランティアを頼るようでは、つらいと思うのです。ここまで仕事ができるようになってきているのです。その誇りに見合った体制を取るべきだと思っていますし、それは可能だと思っています。具体的には、今後、「ハートニット」という名前を、被災地復興の物語を背負ったブランドとして残していくことを、企業さんが提案くださっています。

——ボランティアの「ハートニット」は終わり、仕事としての「ハートニット」ブランドが立ち上がるのですね。

はい、そういう流れにあります。そして、おそらく編み手の方々のほとんどが、分業しながら力を合わせて、その流れに乗って行ってくれると思っています。ハートニットというボランティアは終了し、ハート

ニットという仕事が始まります。そのために、バザーを今年度で終わろうと思っています。

——「復旧」を超えて「復興」へ進む、その具体的な事例を、ハートニットに見ることができると思うのですが、いかがでしょうか。

ハートニットは、その立ち上がりの時から、「復興」とは「新しい何かを生み出すこと」だ、と考えてきました。今、まさにその段階に差し掛かっていると思います。岩手の沿岸部には漁業以外には産業が少ない。そして高齢者や女性に見合った仕事がない。私たちは産業を生み出せないかと思ったけれど、それはできないと思った。でも、仕事は、生み出しつつあると思うのです。

実は、私の中では、小岩井ブランドのある岩手で、新しい産業が生まれればと願ってこのプロジェクトを始めました。そして県などに実際に相談してみたのです。その中で、ああ、大きなことはできないんだ、と気づかされました。そうして、改めて足元を見つめてここまで来ました。

——「産業」が興っても「仕事」がない、ということが、起こりがちだと思います。一人一人の生活と人生に寄り添って「仕事」がありますね。「産業」は一人一人をその周縁に置き去りにして立ち上がることもあり得る。

はい、まさにハートニットが、その意味で「仕事」になりつつあると思います。具体的に、東京の都心に会社を出している世界的な企業が三つ、山形県にある世界的な

繊維・織物の会社の一つ、そして岩手県内の大きなシェアを持っている地元企業が二つ、それぞれ、企業のビジネスチャンスとして、ハートニットとの提携を始めてくださいました。「メイドインジャパンの手作り製品」が、国際的な市場から求められていたことを知らされています。

産業として考えると、「メイドインジャパンの手作り製品」は、なかなか、成り立たないようです。結局、時給換算してしまうと、手仕事は「割に合わない」。でも、津波被災地である三陸沿岸部には「仕事」がない。生活は成り立つ程度にそれぞれ収入があっても、それ以上の何も、ないと思われてきた場所なのです。そこに、「仕事」が生まれた。不思議なかみ合わせの良さを感じています。

ボランティアの手を離れて、新しい手編みの仕事が動き出す。ようやく、ハートニットプロジェクトも「復興」に手が届き、そのボランティア活動を終了する。今そういう段階を迎えているのだと思っています。



◆◆今回、別添えのカタログに、ハートニットの製品を（少しだけですが）ご紹介しています。実際に手に触れて、新しく生まれた「仕事」の成果を確かめていただければ幸いです。◆◆

ハンドクラフトで、新しい街興しを

(インタビュー ライフワークサポート響 阿部泰幸さん)

被災直前からソーシャルワークの働きに従事し、そして被災直後の混乱の中を潜り抜けるようにして支援を続け、今なお活動を継続している方がおられます。「ライフワークサポート 響」という団体を立ち上げた阿部泰幸さんです。行政や大手 NGO・NPO の支援からこぼれてしまう「難しいケース」に単身乗り込んで行かれる阿部さんは、今、新しい「町興し」にも取り組まれています。支援が復興へとつながる小さなサイクルがそこに立ち上がりつつあるように思われます。阿部さんのインタビューをここにご紹介いたします。(聞き手：川上直哉)

——被災地の最近の様子をお知らせください

被災者支援活動については、広報を使わず、口コミで展開してきました。それで被災者の状況の変化を肌感じてきたように思います。行政もマスコミも、その変化のスピードには、なかなかついていけないようです。

例えばこんなことがありました。今、仮設住宅から、どんどん人が退去しています。その結果、せっかくできたコミュニティーを失う悲しみがあり、また、孤立化が進むことが心配されています。その具体的な事例がありました。家庭内暴力、いわゆる「DV」の案件です。仮設住宅にお住いの間は、薄い壁が「幸い」して、暴言や怒鳴り声が隣家に響き渡り、介入してくださる方が出て、事態の進行が食い止められました。しかし知らぬ者同士が隣り合う復興住宅に移ると、厚いコンクリートの壁に閉じ込められるようにして、だれも助けに来られなくなってしまった。お母さんと娘さんは危険を感じるようになりました。デリケートな事案です。しかし、これまでこうしたケースに対応してきた経験を活かして、一週間程度で保護・自立への道筋をつけることができました。これまでの積み重ねが活きてきていると思います。

気仙沼でも、南三陸でも、仙台でも、虐待は起こっています。逃げ出したくても逃げられない人々とつながり、保護し、施設につなげ安心できる環境を整えそうして初めて仕事を見つけて自立へ進むことができます。更に支援を続けなければと思われています。

——続けるために、工夫が要りますね。

活動は、募金によって支えられてきました。しかし現在、当初の2割くらいまで、募金額は減ってしまいました。そこで、自助努力として、活動の中で会得したハンドメイドの販売を始めました。支援の中で悶々としてきたことを、作品を通して伝えることができると願っています。

制作の時間を確保しますと、一日3時間程度しか睡眠時間が取れない、ということになります。というのも、辛い現実を抱える方は、主に夜に相談を下されるからです。状況によっては、すぐに対応しなければならなくなります。夜は、相談対応、日中は、直接面談や役所との交渉、その中で、夜1時間から2時間のものづくりに励んでいます。

今の課題は、その販売経路です。通販も考えましたが、かえって時間が取られることが

分かりました。そこで、イベントへ出店をするようにしました。

——具体的には、どんなことを作品で表現しようとしていますか？

「復興は、自然破壊となっている」ということです。そして、目に見えるものに集中し、被災者さんは見えなくなっている現実がある。自然を大事にできない人間は、人間を幸せにはできないと思うのです。逆に、人間を大切にすることで、命に優しくなる。そのことを作品を通して伝えたいと思っています。

震災以降に、ネイティブアメリカン（所謂「インディアン」）の物語「ウォリアーズ・オブ・ザ・レインボー」を知り「被災地の復興に必要なものはこれだ」と思いました。

その物語はこんな感じです——ネイティブの世界では、大自然は、私たちの世界の兄弟とされます。兄弟を大事にしよう、と、教える。あるネイティブアメリカンのおばあさんが、都会に出てしまった孫を、ネイティブの世界に連れて行った。その孫は、すぐに一つの疑問を持った。「この聖なる大地を他人に引き渡してしまったのは、いったいなぜなのか」。その悶々とした思いを知ったおばあちゃんは、その孫こそ、自分たちを復活させてくれるのではないかと考えます。そしてその孫を「虹の戦士」へと、育て始めるのです。子どもは、暗闇を怖がる。それを乗り越えるために、おばあちゃんは、暗闇を心から愛することを教

える。狼も、大好きになれば怖くない。対人間でも、同じだ。——これこそ、今、被災地の復興に必要なことだと思いました。人と人との争いが、被災地にあふれています。力ある被災者が、力ない被災者を押しつぶしている。それを解決しなければ、真の復興を成し遂げることはできない。「自分が、虹の戦士になろう」と思いました。それで、出店する際の店舗名も「レインボー・ウォリアーズ」としました。店舗に「インディアンの国」のテーマを通して、被災地に伝えたいテーマを表現しているのです。

——これからの課題は何でしょう

最大の被災地の一つである石巻の津波浸水地域で、新しいハンドクラフトのイベントを立ち上げてみたいと思っています。支援活動の経費を獲得するだけではなく、そのイベントによって、被災地の活性化が実現すればと考えているのです。具体的には、ナイトマーケットをやると思います。「クラフトナイト」を夏祭りとして催行する。一度来たら、帰りたくなくなるような企画を、被災地に立ち上げる。この夏に実現できるように、努力をしています。

被災地には手仕事を立ち上げる支援が展開しました。そうして生まれたクラフター同士の出会いが生まれ、そして相互に刺激しあう場を、この夏、生み出したいと願っています。

◆◆別冊のカタログに、「津波の中で揉まれたシーグラス」のアクセサリーなど、阿部さんの作品をご紹介します。ご購入頂ければ誠に幸いに存じます。◆◆



イベント会場の店舗「レインボー・ウォリアーズ」でクラフトの実演をしている阿部泰幸さん

献金感謝

お支えいただきました。本当に、ありがとうございました。(東北ヘルプ事務局)

2018年3月1日～2018年3月31日 献金者ご芳名(敬称略・順不同)

※この期以前の献金者ご芳名は、ニュースレター2018年イースター号をご覧ください。
(東北ヘルプのホームページ touhokuhelp.com/でご高覧頂けます。)

IGL広島福音教会 青柳芳明 旭川星光教会 尼崎教会 安藤真理 井形英絵
石川裕美 今川幸子 氏家教会 大曲ルーテル同胞教会 金井美智子 坂上好登
亀戸教会 経堂緑岡教会 喜界教会 久宝教会 恋が窪キリスト教会
堺清水橋教会 酒井照子 札幌教会 頌栄教会 竹本栄子 土居理也子 東
京告白教会 教会学校 都倉久子 豊明教会 名古屋中央教会 沼津岳南教会
東中野教会 東広島教会 姫路野里キリスト教会 福山天使教会 藤田直子
保恵キリスト教会 道本純行 南浦和教会 三好崇子 元浦河教会 八重山中
央教会 安田信人 柚之原寛史 下谷教会 八ヶ岳中央高原キリスト教
会 横浜シオンキリスト教会 ヨロコビケンキュウカイ 赤崎克俊 牟田美幸
伊奈シャロームチャペル・キリスト教会 国際基督教大学教会 小倉徳力教会
松井田教会 青戸教会 子ども礼拝 男山教会 渡辺滋子 内田公子
日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室 石丸新 匿名多数

(以上)

編集後記

東北ヘルプは、その成立当初、「終わるために励む」ことを目指して立ち上がりました。2014年に事務局をNPO法人化したとき初めて、「持続すること」が可能になることを目指し始めました。2016年に海外からの資金を用いたプロジェクトを全て終了させ、事務局を最小化(事務局長一人の体制)して、計測所職員一名と併せて職員2人の東北ヘルプとしました。そして2017年度を無事に終えることができました。この間、多くの支援団体が「撤退」して行かれました。そのたびに、現場には切ない痛みが残されました。

今、2018年度総会を前にしています。事務局長はこの春から、日本基督教団石巻栄光教会の主任担任教師(牧師)を兼務することとなりました。いよいよ、「長く続ける」ための体制を整える段階に至ったように思います。ここまでの歩みに寄せられた皆様の思いと祈りに感謝しつつ、引き続きのご支援を希う次第です。

(東北ヘルプ事務局)

収 支 計 算 書

NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

自 2017年 4月 1 日
至 2018年 3月 31日

(単位：円)

| | | |
|--------|-------------------|------------|
| 会費収入 | (正会員・協賛会員 合計21件) | 69,000 |
| 献金収入 | (教会・団体・個人 合計292件) | 11,975,262 |
| その他収入 | (預金利息等) | 3 |
| 収入計 | | 12,044,265 |
| 給料手当 | (職員給料手当・退職金を含む) | 3,447,850 |
| 法定福利費 | (社会保険・労働保険) | 410,991 |
| 新聞図書費 | (書籍代) | 99,169 |
| 通信運搬費 | (電話・郵便・運賃) | 625,220 |
| 賃借料 | (コピ機・レンタカー) | 87,324 |
| 支払手数料 | (銀行手数料) | 92,892 |
| 外注費 | (社労士等) | 744,120 |
| 消耗品費 | (10万円未満の消耗品) | 51,597 |
| 事務用品費 | (10万円未満の文具等) | 371,167 |
| 広告宣伝費 | (ニューズレター等) | 695,059 |
| 租税公課 | (償却資産税・印紙等) | 7,200 |
| 旅費交通費 | (高速代・JR券代等) | 1,990,459 |
| 燃料費 | (ガソリン代) | 382,219 |
| 地代家賃 | (家賃・駐車料) | 418,347 |
| 保険料 | (自動車保険) | 77,790 |
| 会議費 | (会食代・会場代等) | 426,562 |
| 支援費 | | 2,136,058 |
| 支出計 | | 12,064,024 |
| 当期損益金額 | | -19,759 |
| 前期繰越損益 | | 1,268,173 |
| 次期繰越損益 | | 1,248,414 |

| 献金件数と 金額の推移 | 計 | |
|----------------|-------|------------|
| | 件数 | 金額 |
| 2015年1～12月 | 629 | 17,973,940 |
| 2016年1～12月 | 692 | 14,465,518 |
| 2017年1～13月 | 750 | 12,491,525 |
| 2018年1～3月 | 204 | 3,942,339 |
| 合計 | 2,275 | 48,873,322 |



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北郡山キリスト福音教会牧師・ふくしま HOPE 代表）

理事 金子千嘉世（日本バプテスト連盟郡山コスモス通りキリスト教会牧師）

監事 小西望（日本基督教団仙台北教会主任担任教師・日本基督教団東北教区総会議長）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

※届書等は、すべて2018年5月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com

表紙写真 : 2018年6月8日の南三陸町志津川 中澤竜生牧師撮影